

## モニター様 No. 10

Blue Ever Blueの知名度を押し上げた、姉妹（下位？）モデルにあたる、868よりもすべてが洗練され、高品質なものになっている。

ただの「変わったメーカー」でしかなかった"Blue Ever Blue"の「本気」、それが"Blue Ever Blue Mercury Model 878"なのだと思うされた。

見た目はいかにも剛性の高いアルミ製で、ケーブルも太さこそ普通だが、サラサラとしたクセのつきにくいもので質感は非常によい。

868では丸みのあるプラスチックで、やや不恰好にも見えたハウジング背面も平らで、見た目・重量バランスがよく、値段以上の高級感が感じられる。

付属品のイヤープースも豊富で、多くの形の耳にフィットするであろうが、本体が大きいため、イヤープースはフィットできても、本体が耳に入りづらい。

普通に装着するのでは、安定性に欠け、タッチノイズも大きいため、耳の後ろにコードを掛ける、通称"Shure 掛け"が実質、必須であると考えてよい。

Shure 掛けに抵抗感がなければ、装着感はかなり良好と言ってよいだろう。

音の傾向としては、前機種と同じくピラミッド型で、低音が支配的であり、中音域と高音域はおとなしめである。全体的に、独特な音をしているわけではない。

「密閉型・低音が支配的・やわらかめの低音・音場広い」と、こう書いて、もしあなたが「なるほどそういう感じか」と思うことができるくらい知見のある方であるならきっと大体そのとおりの音をしているはずである。

個人的な所感であるが、下位機種の868の同帯域はあまりにも低音に潰されており、「価格帯の割に低音が良く鳴る」そして「価格帯の割に音場が広い」というだけの「でも音は別に良くないよね」というだけの「フツのイヤホン」であった。

しかしながら、本機"Mercury Model 878"は、そういった弱点を克服した「フツに」しかし「イイ！」イヤホンである。

一聴して音に不足がない。どの音域もつぶれている感じはしない。そして、868Bで感じた「特徴」を、すべて受け継いでいる。

ウォームで質のよい低音の良さも、そして一聴して驚かされる音場の広さも、基礎的な「音の良さ」がクリアされたことによって、初めて本当の輝きを見せているように思われる。

筐体を耳から外して「どこからこんなに広い音が？ 本当に密閉か？」と、まじまじ見つめてしまうくらいには音場が広い。どこかヘッドホンのような音がする。

広いとは言っても、10Proのような横に長い音場ではなく、もう少し縦の方向に広がりを感じる。GradoのiGiを無理やり密閉型にしたらこうなるのだろうか？という印象である。

ロックを聴けば、バスドラの音圧を心地よく感じられる。かといって耳に痛いようなサ行の刺さりやシンバルの高音はマスクされ、深いことは考えずにノリで聴くには非常によいバランスではないだろうか。

ジャズについても得意分野と言ってよく、心地良い低音を心地よい音場で、心ゆくまで味わうことができる

だろう。

高音がどうしてもおとなしいため、テクノ・エレクトロはあまり得意とは言えないが、ゆったりとした曲調でトラック数のさほど多くないもの、ミニマルな4つ打ち系などであれば悪くはない。

ピアノ系の曲も苦手というわけではなく、音場の良さはややスポイルされるものの、低音の安定感が、いい具合にピアノの「うまみ」を引き出し、案外、心地よい音色を聴くことができる。

オーケストラなどは、まさにこのイヤホンのうまみが活かされるところで、低音の迫力と広い音場により、（ハイエンドヘッドホン・スピーカーには無論、敵わないがポータブルオーディオとして考えた上で）思わず笑顔になるリスニング体験ができるだろう。

全体をとおしてやはりウォームで、どんな曲でも気持ち良く聴かせるイヤホンであると言える。Hi-Fi でこそないが、「いい音」「いいイヤホン」であることは間違いない。

音源のビットレートが低くてもそれなりに聞けるが、高音質な音源特有の、定位が明確に決まる感じも音場が広いがゆえに強く感じることができる。

元の個性が強い上に、音源の粗を隠す方向の機種なので、アンプ・DACによる変化はわかりづらい。

また、元から低音が強めなため、Walkman や Fiio 系の DAP では少しバランスが悪く感じられる。

そういった意味では、iPhone や iPod などとの、気軽な組み合わせがベストではないかと思われる。

あまりそういった用途を意識して購入されるイヤホンではないと思うが、アニメソング、アニソンについての感想にも触れることにする。

現在、オリコンにもたびたび顔を出し、一部ハイレゾ配信等で存在感を増しつつあるアニソンだが、本機はさほど向いていないかも知れない。

相性が悪いというほどではないが、女性ボーカルがやや弱く、リズムトラックに吞まれてしまいがちなので、「アニソン専用機」という立ち位置は難しいだろう。

表現が難しく、たいへん感情に寄った表現になるが、本機は"今風の音"を追いかけていない、希少な機種ではないか。そんな風に思われる。

ピシッ！とした高音であるとか、アタック感の強い低音であるとか、そういう傾向ではなく、もっと「普通に」「普遍的に」よい音を目指しているのでは、と。

前機種では特徴が表に出過ぎていたために気付かされることはなかったが、こうして「一応どこに出しても恥ずかしくはないですよ」と言える特性を獲得して初めて浮かび上がってくるような美学。

カナル型とはいえ、並外れた遮音性を持っているわけではないので、外の音だってそれなりに入ってくる。しばしば遮音性がその性能と等価に語られるカナル型イヤホンの世界では、それが元で忌避されることはいくらかでもあるだろう。

これだけ褒めておいて何だが、同価格帯であれば、他によい音のするイヤホンはいくらかでもある。

いくら音質が進化したとはいえ、868 に比べ、価格がほぼ二倍となれば、「安いのに」という枕詞は使えなくなる。

コストパフォーマンスで言えば、「価格相応」という言葉がよく似合う。

本機の音は、「5000 円以上の価値は間違いなくあるが、10000 円以上の高級志向機とは明らかに違う」と、そう感じさせられるものだ。

そして、パッケージやウェブページで、「自然な音」という触れ込みで喧伝されている本機を始めとする Blue Ever Blue 機だが、私はそう思うことはなかった。

どうも強調されているようにしか感じなかったし、根っからの低音好きでない自分にとっては、鼻につくことさえあった。

しかし、長く付き合っていると、この場合の「自然」とは、「音の自然さ」だと考えない方が良いのでは、と思い直した。

日々、電車に乗るとき、カフェで作業するとき、散歩をするときに使っていると、気付くのだ。

本機の音は「自然体」で聴くのが最もいいのだ、と。

音場の広さは、耳元で鳴っている不自然さを取り払ってくれるものだし、低音の強さは、いい具合に不快な騒音をマスキングしながらも、完全に遮音されることはないので急に声をかけられても反応できる。

「自然に」「普段使い」する。そう言った使い方こそが、"Blue Ever Blue Mercury Model 878"には相応しいのではないか、と思う。

本機で本気を見せた Blue Ever Blue だが、この次はぜひ、「他にもいいものはあるけれど」という枕詞が不要となる、高価格にして高品質なフラッグシップモデルを出して欲しいものだと思う。

「本気」の「次」は一体、何なのか。今から期待を込めて待つ価値はあるのではないかと思う。それだけのポテンシャルは、本機にてとくと世界に周知されたのだから。

-- 以上 --

<注意>

本レポートは、シースピリッツ合同会社の Blue Ever Blue Mercury Model 878 モニタープログラムに基づいて選定されたモニターの方が作成したものであり、その著作権はシースピリッツ合同会社に委属し、個人的な閲覧目的のために供するものです。転載等をご希望の際は、シースピリッツ合同会社までご相談下さい (info@hakojiro.com)。